

平成30年度 奈良市立登美ヶ丘幼稚園 研究実践概要

園長名 奥 佳也子
全園児数 21名

1. 研究主題 「豊かな心を育み、いきいきと活動する幼児をめざして」
— 自らかかわる・感じる・考える環境構成のあり方 —

2. 研究年度 初年度

3. 研究主題設定理由

“どうなっているのだろう” “どうしたらうまくいくのだろう” という子どもの心の動きを捉え、幼児自身が面白くなる工夫をしたりうまくいくように何度も考えたり試したりするための環境構成のあり方を探り、子どもの遊びや生活の充実を図りたいと考え、主題を設定する。

4. 具体的な研究内容

- ①研究のねらい

○自らかかわろうとする場面を捉え、子ども自身が感じたり考えたりするために必要な環境や援助を明らかにする。

- ②研究の重点

○子どもの思いに寄り添い、何を楽しんでいるのかを見極め、適切な環境を考える。

○うまくいかないなどの葛藤、もっと面白くなるための試行錯誤、友達と一緒に考えたり思いを出し合って進めたりする力を引き出すための環境構成、援助のあり方考える。

- ③活動の方法

環境構成

援助

保育者の意図

- サーキット遊び【4、5歳児期間 5月～7月】

自分たちで用具を選びやすいように遊びの場の近くに準備し

子どもたちの楽しみ方を探り、平均台や移動式の鉄棒など用具を増やす

スタンプラリーを準備し、挑戦する意欲や達成感を味わえるようにする

園庭にタイヤ・フープ・太鼓橋など子どもたちが遊びやすいように準備しておく、子どもたちは思い思いに用具をつなげてコースを作っていく。毎日、並べ方を変えたり固定遊具とつなげてサーキット遊びを楽しんだりする姿を、保育者は見守り子どもたちの工夫や頑張りを捉え認めていった。

数日後、その姿に刺激を受け、4歳児も遊びに加わった。始めは、5歳児が作ったコースを回っていたが、学級全体での話し合いで話題に挙げたことで、4歳児も、コースづくりに参加するようになった。タイヤや一本橋など少し高さのあるところでは戸惑う姿もあった。その姿に5歳児が気付き、優しく手を差し伸べるかわりが見られた。

4歳児にとってモデルとなる5歳児の遊びの姿を近くで見ることが大きな環境になると考え、学級全体での話題に取り上げる

〈反省評価〉

・継続して遊んだことで、共通のイメージを持ちながら次はどんな風にしようか話題にすることができた。自分の思いを伝えたり友達の思いを聞いたりする中で、自分の思いとは違う思いに気付いたりどのように伝えたらうまく伝わるか考える機会となった。

・4、5歳児のかかわりの中で、年長児にあこがれの気持ちを持ったり刺激を受けたりすることができ、また、年少児への優しい気持ちを持つ機会となった。

○さっぱりレストランへようこそ【4歳児10月～11月】

野菜の種類により分類し、用具を使いやすいように整理しておく

作っている人とお客さんの座る位置や互いの動きが見え、作ったものをすぐに出せる配置を子どもたちと考える

看板づくりができるように、レストランの近くに制作コーナーを置く

子どもたちの遊びを保護者に伝え、野菜の皮などを持ってきてもらえるよう発信する

リンゴの皮をままごとの材料に準備したところ、皮を包丁で切ってフライパンで炒めて楽しんだ。そのリンゴの甘い香りが周りの友達に好評で一緒にいた数人の幼児とともに、もっと作りたいという気持ちが高まった。そこで、園内にある植物を子どもたちと探した。

園庭にあるサツマイモの蔓やキンカン、ゆずの実を見つけた子どもたちは、早速切り始め、小さく切ったり汁を絞ったりして楽しんだ。

園庭のユズの香りが甘酸っぱく子どもたちが気に入り、さっぱりという表現で楽しみ、「さっぱりサラダ」「さっぱりレストラン」にしたいと、子どもたちからの声があがった。たくさんのお客さんに来てもらいたいと、どうしたら来てもらえるかを話し合い、看板を作ることになった。子どもたちが字や絵をかいて協力して看板をつくった。看板を作ったことで遊びが年長児にも広がった。「いらっしやいませ」「この料理ください」とやり取りが始まり、レストランができた。

保護者にも協力をお願いし、家庭から野菜の皮を持ってきてもらい、いろいろな野菜や果物で、感触や香りを繰り返し楽しみ料理をし、食べてもらうことを喜んだ。

以前からごちそうづくりには興味を持っていたが、予想以上に野菜の皮に興味を持ち、楽しむ姿から、園庭の植物にも興味を持ってほしいと思い、園内植物を子どもたちと探す

子どもたちが無心になって、感触や香りを楽しむ姿があり、子どもたちの感じていることを言葉にして友達や保育者に伝える楽しさを味わってほしいと考え、子どもたちの言葉を引き出せるようかわった

〈反省評価〉

・ナイフで切ったり、触ったり、においをかいだりして、五感で感じたことが子どもたちの会話を弾ませたり、明日もやりたいもっとやりたいという意欲につながった。

・作ったごちそうをみんなに食べてほしいという思いから、お店があることを知らせるためにどうしたらよいか友達と考え、アイデアを出し合える場所を作ったことや子どもたちの思いをサポートし、考えたことが実現できた喜びを味わうことにつながった。

・遊びの様子を伝え、保護者に協力をお願いしたことで、材料への興味（野菜の種類・さわり心地・香りなど）や、調理方法への興味（切る・煮る・炒めるなど）が高まった。家庭でも親子の会話につながり保護者の園での活動に理解してもらう機会となった。

○明日は氷できるかな【5歳児1月～2月】

<p>プールでスケートができるように落ち葉などを掃除したり水を張ったりしておく</p>	<p>12月、タライの中に氷が張ったり氷の中で凍った落ち葉のきれいさに気付いたり、霜柱が立っているのを見つけたりした。去年プールに張った氷でアイスホッケーのようにして遊んだ経験を思い出し、氷が張ってまた遊べるだろうと期待していたが、今年は暖冬だった為、なかなか氷が張らなかった。そのことが氷ができる条件に着目するきっかけになった。氷をつくりたいという気持ちから「プールは大きいからできないけど小さいところだったらできるかな」「プールの場所が悪いのでは」という意見が出たので、氷の情報が載っている月刊絵本を置き皆が気付くのを待った。子どもたちが温度や気候に気を留めながら氷づくりを楽しむ姿があった。「氷は零度になると凍る」と<u>温度が関係していることに気付いた子どもがいたので学級全体で共有し、温度計を保育室の子どもたちが見えるところに移動させた。</u>温度、天気と氷の様子を子どもたちなりに予想し、結果を確かめ「凍る条件」についていろいろ調べたり試したりする姿があった。</p>	<p>去年度楽しかった経験を子どもたちが思い出したことによって氷に興味を持ってほしいと考え、環境整備をする</p>
<p>温度計や月刊絵本を用意し子どもが見たり考えたりできる環境を整える</p>	<p>子どもたち同士で話し合いが活発になればいいと考え学級全体での話題に取り上げた</p>	<p>子どもたちが予測したり結果を確認したりする楽しさを感じてほしいと考えた</p>

<評価・反省>

・凍らなかったことが、凍らせたいという気持ちにつながった。そのために、自分たちで調べたり試したりする姿が出てきた。絵本や図鑑などから、自分たちで凍る条件を発見できたことが、次への探求心につながった。

5. 研究の成果

幼児の“やってみよう” “どうしたらうまくいくかな”という気持ちに寄り添い、進めてきた。その中で自らかかわる・感じる・考える姿につながる環境について職員間で話し合い共通理解して進めることができた。

- ・実際に触ったりにおいを感じたりするなど五感で感じたことで、子ども同士の会話が活発になり、好奇心を引き出し考える姿につながった。
- ・自分のイメージしたことを発言したり実現したりできる場づくりが大切であることを再確認できた。
- ・身近な環境構成を整理し、子どもたちが使いやすいように再構成していくことが自ら考え、試すなど自分たちで進めようとする姿につながることを改めて感じた。

・少人数であることを活かし、異年齢とのかかわりから憧れの気持ちを持ったり刺激を受けたり優しく接する姿につながった。

6. 今後の課題

今後も、日々の保育を振り返り、適切な環境構成・援助のあり方を考え、保育の充実に努めていきたい。